

生産技術研究所ありがとう

東京大学名誉教授 (元第3部教授)

齋藤成文



戦後の教育制度改革を契機として、東大内部で経済学部を中心とする「戦争の申し子第二工学部廃止論」と「講座梃ぎ取り運動」が生じたことは歴史の示す通りである。当時第二工学部に在職していた私共教職員がどのような気持でおったかを語るエピソードを述べよう。

昭和26年の末、第二工学部最後の電気科卒業生の教官への謝恩会は、この期をもって定年退官される瀬藤象二先生（第二工学部初代および最後の学部長）の送別の会ともなった。先生は静かにこう語られた。『昨日、私は平賀譲先生（元東大総長）の墓前に参り、「私は先生から命ぜられて第二工学部を創りました。そしてその私に同じ大学からこれを潰せと云われました」…』そこまで云われ、涙をはらはらと零された。あの剛気な瀬藤先生の涙を見たのは前にも後にもこれ一回であった。当時の先生の断腸の思いは私共第二工学部教官全体の想いでもあった。

これより先に手続き上は第二工学部の後身として、相当数の講座を東大内に放出した後、生産技術研究所が昭和24年5月に発足した。学理を実際の工業製品として活かすまでの生産技術（広義）の重要性、特に荒廃の極にあった祖国日本には最も緊要であるとの瀬藤先生を中心とした当時の教官の総意に基くものであった。瀬藤先生は理化学研究所におけるアルマイト実用化のご経験から、また産業界から転身して第二工学部に移られた相当数の教官ご自身の体験から出た生きた結論でもあった。

発足当時の屈辱にも似た状況を跳ね除けようとの反骨精神こそが生産技術研究所の今日の基礎を築いたものと堅く信じている。そして工学全般に涉って幅広い専門分野を持つ研究陣すべてを有しているという、生産技術研究所ならではの総合開発プロジェクトが自然発生的に次々と発足した。

その一つが観測ロケット特別事業である。その詳細は省くが、高速輸送手段としてのロケット研究と、国際地球観測年にわが国も観測ロケットによる成果を熱望していた理学関係者の要望が合体して実現したものである。ロケットの糸川先生、エレクトロニクスの高木先生を中心として、空力、材料、構造設計、電波工学、光学観測、そして土木、建築の先生まで巻き込んだ大プロジェクトとなった。その後東京大学宇宙航空研究所を経て、独立した宇宙科学研究所という世界有数の研究機関となったことはご承知の通りである。

私は戦時中、海軍技術研究所で行っていたマイクロ波レーダの延長として、戦後、電電公社（NTTの前身）が開発していたマイクロ波通信のお手伝いをしていた。そして機会があって当時、世界のエレクトロニクスのメッカと謂われていたMITエレクトロニクス研究所に勤務し、低雑音マイクロ波受信の研究を行って2年後帰国した。

この研究が縁となって当時の観測ロケット研究グループの一員となったことが、私の一生に大きく影響することになった。私自身はこの研究グループの主力が新設の宇宙航空研究所に移転した後も、生産技術研究所を本務として、マイクロ波、レーザ工学などの専門分野を担当した。

しかし後になって大変申訳なく想っているのは、併任であった宇宙研の仕事が科学衛星計画へと拡大するに従って、そちらの方にややもすればのめり込んで了った。その上立場上、更に宇宙開発事業団の初代非常勤理事や、宇宙開発委員会非常勤委員まで兼ねることになり、生産技術研究所、特に第3部、そして私共の系統の研究室、それを指導して下さる教官の先生方には大変なご負担をかけることになった。これらの方々のご支援、ご援助がなかったなら、私の東大教授の責務は果たせなかったと、今なお多くの方々への感謝の念で一ぱいである。本当に有難うございました。

私が退官後、もう20年近くになるが、この間の生産技術研究所の発展は眼を見張るばかりである。前東京電機大学々長の岡村総吾東大名誉教授の調査によると生産研の研究員当りの発表論文数は全国でもダントツのことである。その論文は量のみならず、質においても世界的に認められたものが多く、これは生産技術研究所が最近行っている欧米研究機関との数々の共同研究の実績が明確に物語っている。

私共の系統の研究室でも榊之教授を中心とする研究成果は国内外で既に大きく認められている。私は生産技術研究所の現役研究陣の実績に対し満腔の尊敬の念を持つと共に、来年より始まる次の50年への更なる進展を祈念し、また確信するものである。

最後に私事になるが、つい最近今年度の文化功労者に顕彰されるとの内報を頂いた。その内容は生産技術研究所と宇宙航空研究所の仕事、双方に跨っている。有難うございました。